都林泉名勝圖會

三

424

都林泉名勝圖會巻之二

目録

清水寺 朝鮮石
離島石
擬袖摺松
延命院
歌中山 要石
蓮華王院 千鳥井
善源院 什宝
月輪
虫干圖
萬壽寺
虎関禪師趾
正徹墓

同西門圖
田村丸田欟
來善院 看月名所
若松池
燕子花遊宴圖
智積院
東福寺
三聖寺
靈源院
正統院 兆殿司古跡
通天橋 觀紅楓圖

成就院 湯屋谷 烏帽子岩 靈山国阿堂 喜撰山遠景
宝生院
浮瀬 南藏院
阿弥陀峰
法住寺殿古蹟
聊揚觀和蘭人
什寶
鳥燈爐
海藏院
栗棘庵
即宗院

754 A4 3

自然居士墓
同記
南明院
兆殿司墓
清少納言古墳
墨染里　有馬稲荷
豊太閤覇跡
靈雲院
正覺院
俊成卿墓
南昌院
舍人親王陵
梅渓　桃山新善光寺
龍徳菴
遺愛石
荘嚴院
同女墓
清原深養父跡
稲荷初午圖
伏見山
慶雲菴
嵯峨名所　双ヶ岡

都林泉名勝圖會巻之三目録　終

清水成就院
相阿弥作
小堀遠州補作
吉田山
朝鮮石

其一
祇樹籬低界竹
回院庭幽谿俯
溪限誰知雲嶂
藤蘿翠還映
皇城霞綺閑
百々肇
湯屋谷
烏帽子岩

成就院 其二

祇園何必布黄金
泉石都同長者心
披對于今如出世
一庭樹是祇林

新羅弼

田村將軍
遇備延珍

偶尋劉阮入
天台流水飛花
隔世挨孤杖行
迷采藥路犬鷄
聲近白雲堆
艸廬

音羽山清水寺は洛東の佳境なり　嵯峨天皇の宸筆東宝記に國家鎮護の為官府より賜ふ印一面今猶ありて長財とす又額は侍従大納言行成の筆と著聞集にみえたり縁起は歴代編年集成に著し堀川院あまり幸したまひ一七日宿したまふ事元亨釈書にあり大概なり坂上大宿禰田村麿鈴鹿山の鬼神退治の事は当山の縁起にみえたり外の実録聞えず悪七兵衛景清主馬盛久の霊験は平家物語の長門本に詳なり地主の桜はむかしより名高く古詠多し音羽滝は四時増減なく清冽にして所謂五名水の其一にして拾芥抄にあり清水寺に十景あり

古崖懸泉　春巌開花　音羽畳翠　霊鷲疎鐘　洛陽萬戸

鴨河一帯　東郊烟雨　西門遠眺　岩嶺晴雪　亀阜暮靄

新撰朗詠　清水寺上方迎春　正通

烟霞隔路三千界　花柳蔵城十二衢

自然斎発句集

ゑかゝり花咲たくさき深山かな　宗祇

黙雲稿

第五橋東山路斜　飛泉吹雪梵王家　太平有象遊人喜　乱后初看地主花　清水寺天隠

堤中納言物語云

秋ちかうなるまゝに水にこもりて侍しは風の音もあらゝかにふきたるまつの葉はらはらと滝のおとはまにきこえてつれなきおもひをみちかは　うらみのまへにもとめわくちるもしきたるかな

玉葉　法成寺入道摂政清水寺にこもりて侍りけるに詠侍ける

いにしへは身につまされぬものを思ひの山のふる木葉など　従中納言

滝の音もいつゝかはらぬ都にたちかへれとや須にも有るかな　花山院

拾玉

ちりまがふ軒まく人をやとるかな清水寺の瀧の白糸　慈鎮

夫木

とゞこほるかもなき妹にならされて心ならはぬ清水乃滝　俊恵

境内成就院の林泉は名庭にして相阿弥の作後に小堀遠州侯補ある所也据袖の手水鉢蘿茸石烏帽子石は須磨浦よりあつく来る飛石五つの名石は加藤清正朝鮮より取帰つて寄附す泉溪は秀吉公ここに遊び玉ひし時浴室を建られし古跡也今に中門の形遺れり護摩堂は東福門院の御寄附なり此庭造りは洛東の妙境にして遠近の景気を連ねたり又同境宝生院の客殿は佳麗

後京良院の寝殿なりしを寺に移して坊中延命院とす　豊國山
清閑寺音羽嶺が座中の壯觀として書院は林泉よろしく遠を
見れは八幡山山崎淀川の長流鮮にして奇觀は瀧の下南藏
院は酒旗に名高く劉伯倫の徒まつにひとく音羽の瀧飲の興なる
儂家俗が樓を深瀬といふ

歌中山清閑寺の林泉は眞妙にして座中に要石あり　或云　六條院北御陵　小堂の跡をいふ　紫苑墳陵
渡月橋をわたれは獅子口に似たるやうなる谷の名なり　又　高倉院の御陵あれは御
愛樹の丹楓多くして叢林の眺めは錦繡を晒すがごとし　又山谷に松茸生じて
洛陽の貴賤むれ来つて遊筵を儂家風流の隅邑なり

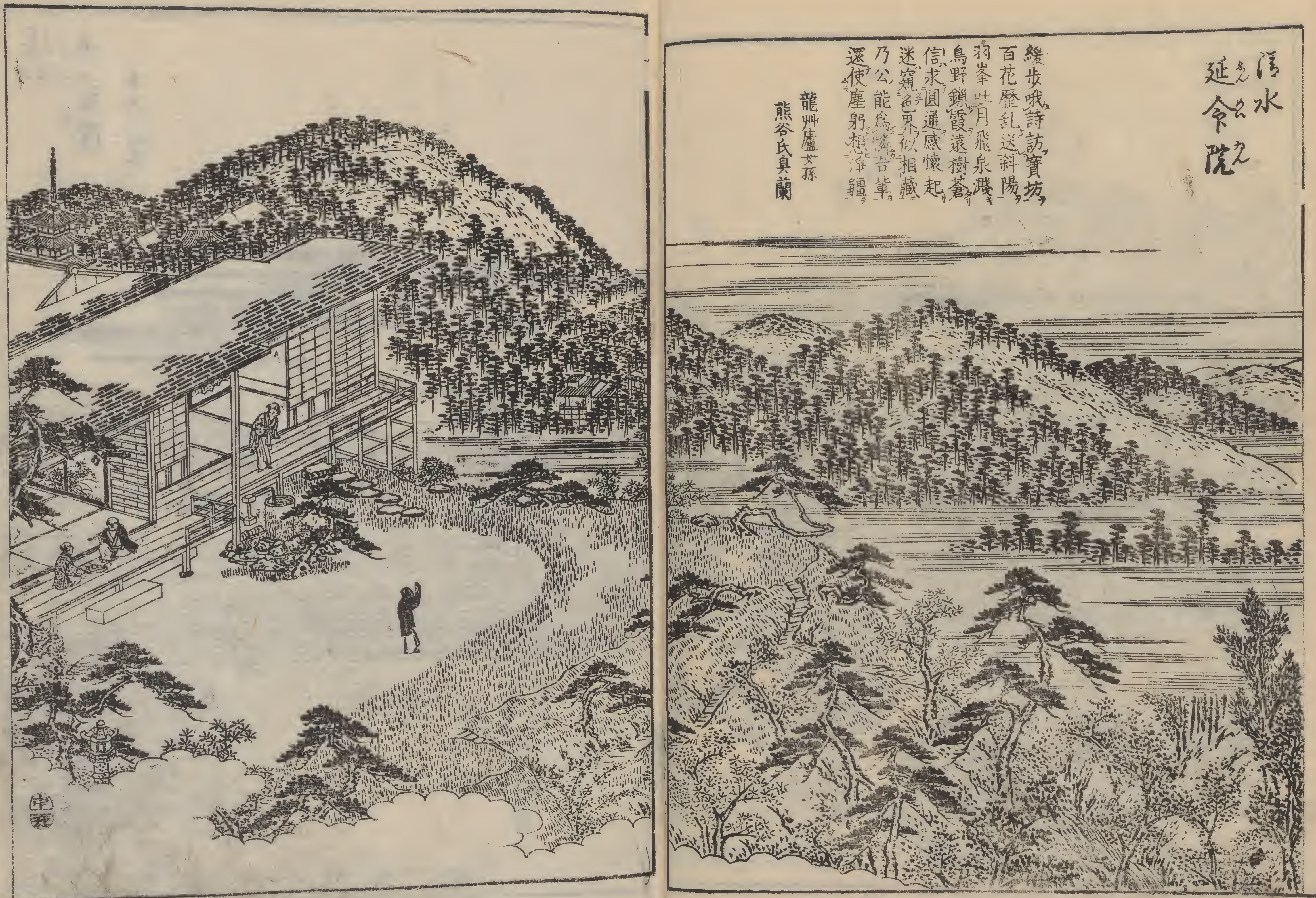
寒居
山風のさそふもちりて消えぬれは桧原かりくちる櫻かな　頓阿
清閑寺西谷原花といふ題を

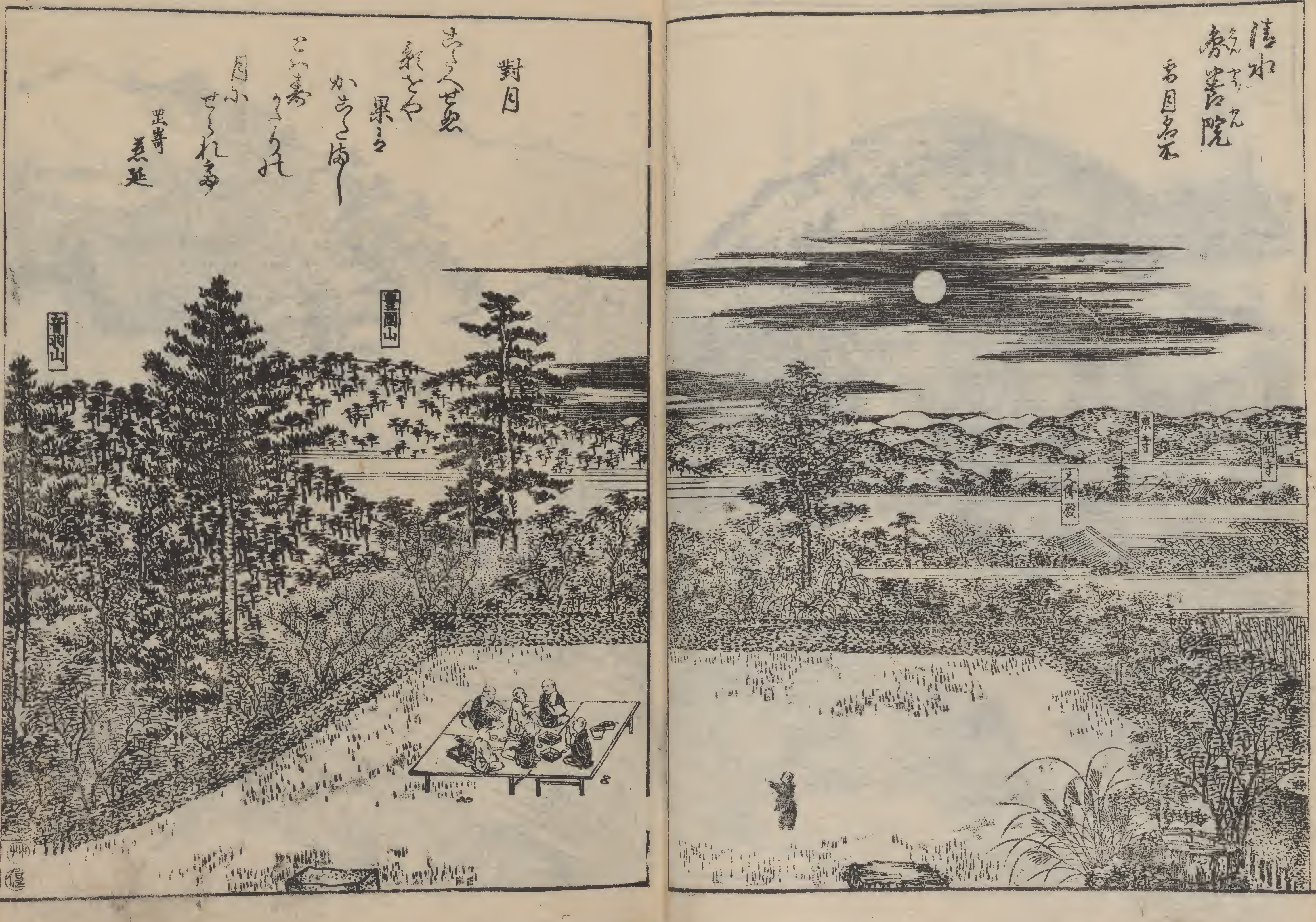
兼好集
東へまかりて侍りし比清閑寺にまうでて道我僧都にあひて
秋はかへりまうでくべきよし申侍りしかは　僧都
かへり来る命しらずめぐりあはん秋をもちかく契りつゝはし　道我
かへし
ゆくすゑのいのちもしらぬ別れをも秋とも契る程ぞはかなき　兼好

藤松池　むかし五条大納言邦綱卿の山荘に藤松亭あり　構泉に大池あり　故に此名あり　旧跡は
滑谷路の南阿弥陀が峯の西北の藪にあり　今田圃となる
宗長日記云
大永六年十月十日下京に出てあふ大津までといふ　中略　藤松の池
志る谷志ら河さらぬだに道の人わづらはしてし三井寺積藏坊
山科花山みちとゆうさく人おほく侍りし　藤鶴檀所にて此そ後
とのへしかり京ちりの人を以て神なしの森て西関屋の軒端にゆ

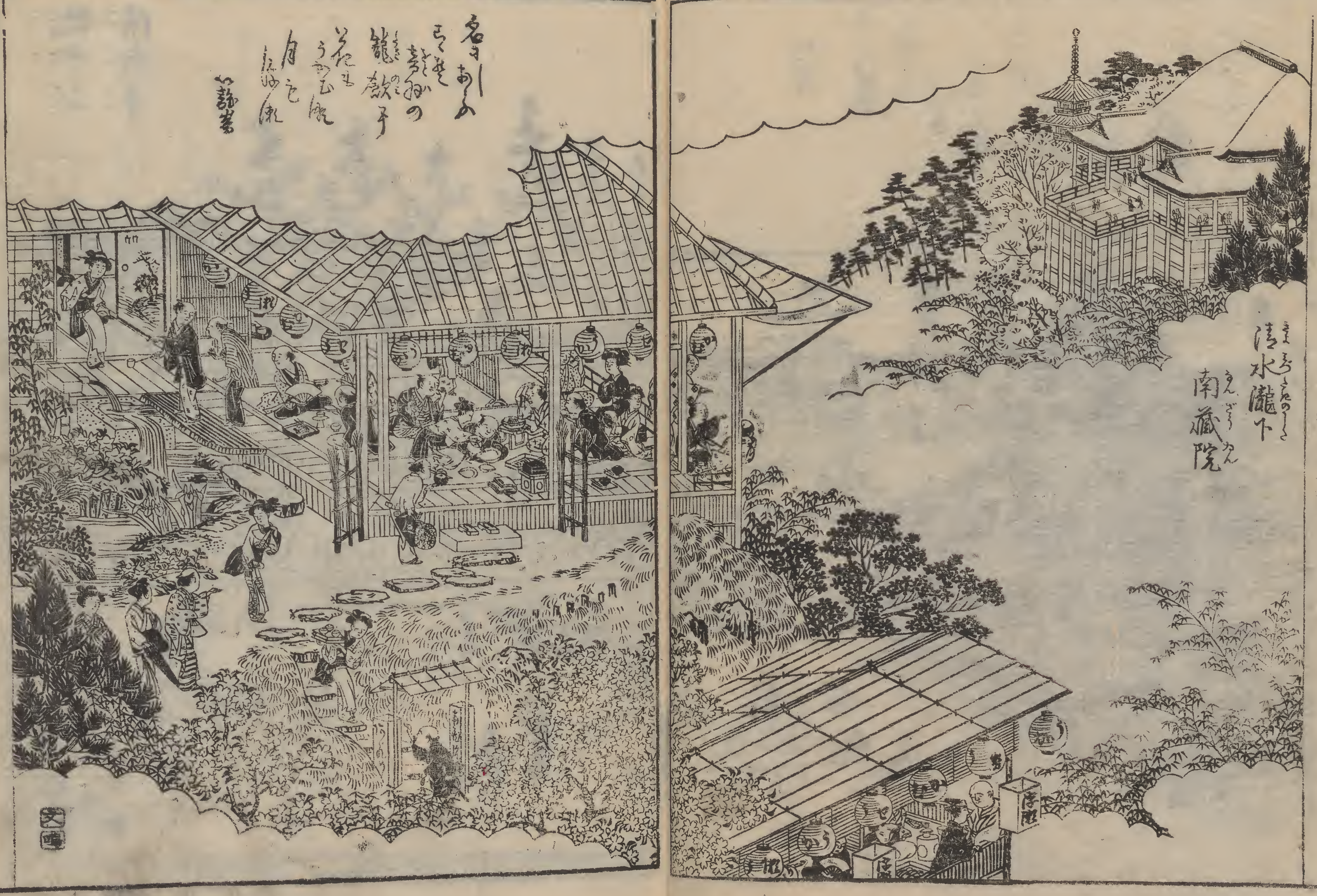
阿弥陀峯　今豊國山といふ　慶長三年豊臣秀吉公を阿弥陀が峯に葬送し　世に此時の
列式あり　八月十八日に薨御ありし　翌二月十八日此嶺に葬り　導師は高野山
興山上人　其外諸宗の僧徒出る　勅使は菊亭右大臣晴秀公　鷹幡大納言長重卿
御供の卿相の諸侯　悉同勢凡而二万余人云
松葉記云
慶長年中豊國社造營の後　阿弥陀が峯と三条の東粟田山に接す
峯は一つとこの嶺
顕昭拾遺抄云
鳥辺山はひとつさか峯也　その在所をさして鳥部山といふ　無常所之
家集
今日ハあまる巌の月影を千世の坂まで人の世をへさらなむ　公任
堀中集
道志あるくさのおほかる身なれども今こそ巌はゆかんとそおもふ　讃人志らず
豊國神廟
題豊國神廟壁
零落東山古廟廓　蒼苔蔓草上頽墻
英霊飛散無巫祝　秋月春風作主張　丈山
豊國社の花は枝につきて赤く上人のもとへ
一枝も折らぬたよりもかなく手折たりなんは花の逢にあらやせ　長嘯子

清水寶生院
靈山
幽地客尋
稀芳花空
掩扉春風
吹処暮
雲飛
華仙


清水
延命院
緩歩哦詩訪寶坊
百花歴乱送斜陽
羽峯吐月飛泉濺
鳥野鎖霞遠樹蒼
信求圓通感懐起
迷窺色界似相藏
乃公能爲憐吾輩
還使塵躬想浄疆
龍州盧女孫
熊谷氏貞蘭



清水
成就院
對月
慈延
音羽山
東寺
光明寺
大佛殿


清水瀧下
南藏院

歌中山（うたのなかやま）清閑寺（せいかんじ）

秋興

とくおれたる
ゆふく草村
ふ露ふかり
あつそ吹く
秋の風影
くまゆく

慈延

蓮華王院の堂前の林泉ハ燕子花咲みだれて初夏の眺幽艶なりむかし
此堂の前なる小醴泉あるよし元亨釈書百錬抄にも見へたり今の閼伽
水なるべし
著聞集云
承安元年六月八日蓮華王院の宗仕る夏に後戸の坤乃角より出る
其四の間に黒き山ありけるを寄りやんとするに老僧出来て云此水
をはねの料に掘ぞ此水ハ細くとも八功徳水其霊潔利益倉識方
役水なくあらむするぞよくよく精進して汲べきなりと云ぞみえたく是
貴なる去程に件の後戸の石切乃下に現に水ありける貴き事なれ
ども是ざりなるをみくまぬ時もあまりさりきて不思議なりける事也
當時その水かんへ汲ぬ所のころ失ぬるにや貴来なし

法住寺古蹟 今の養源院智積院の地なるべし 初メ太政大臣藤原為光公の建立之
文六金色釈迦仏を安じ其後 後白河院ここに仙院を建て
法住寺御所といふ名泉あり桐井といふ今さだかならず

長秋詠藻 嘉応二年法住寺殿の殿上の歌合に関路落葉といふ事を
しぐれの木葉ふみにあきもうつりはく名をこえたる志らのの関　俊成

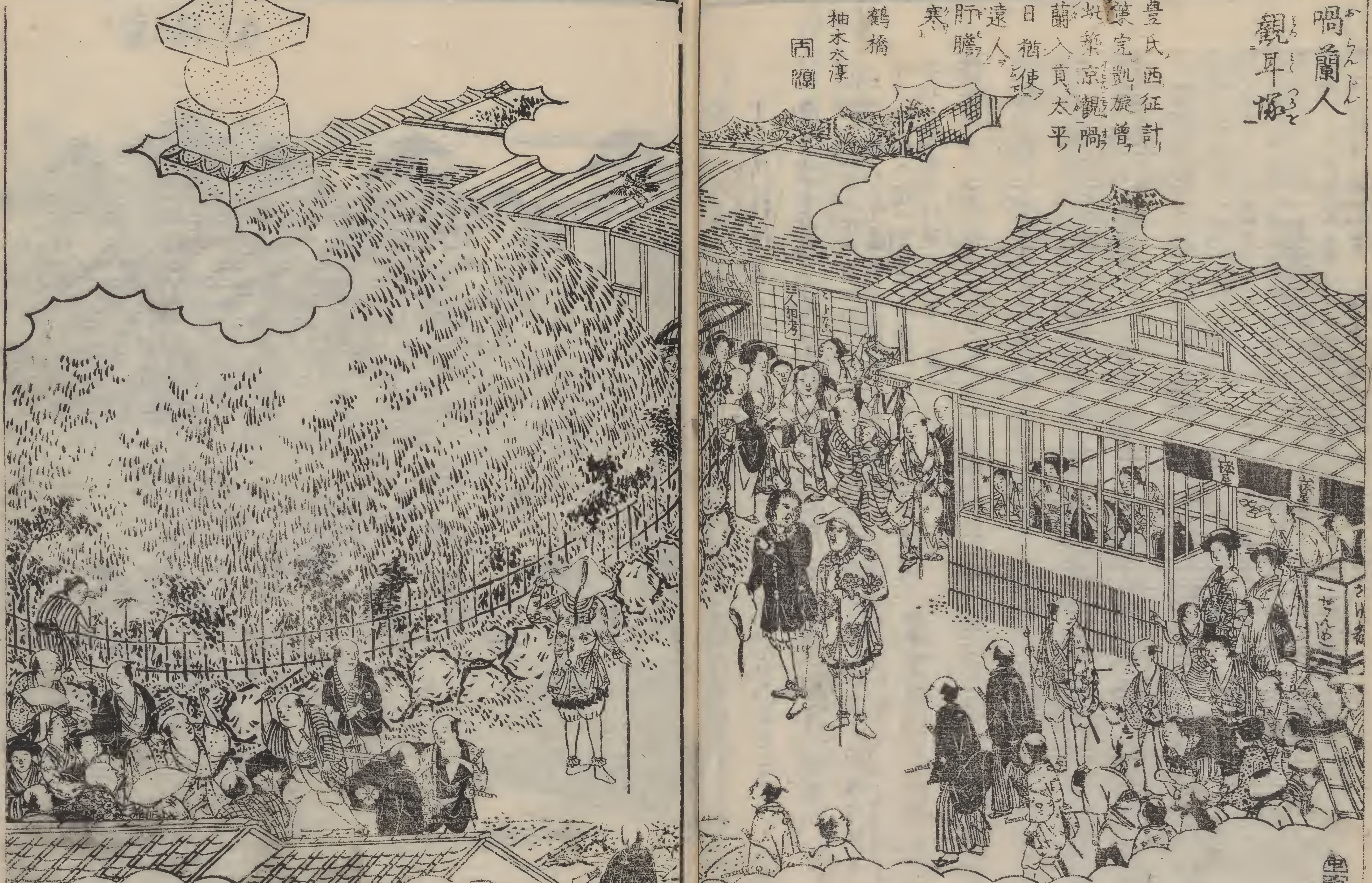
平家物語長門本
嘉応元年十二月廿日法住寺殿ハ御所なりし所應保元年四月
十三日御移徙有て後山水木立かくくの御志なし所に至るまで思召
さまに作らせ給ふにも新日吉新熊野其近辺に祝まいらせなりき

養源院 蓮華王院の東にあり天台宗開山盛伯法印本願ハ贈従二位権中納言
備前守藤原長政の息女豊臣秀吉公の内政大虞院後の崇源院贈一位御興大姉の建立
なり回禄の後ハ崇源院殿大姉の再建之
あれハ英岩の御妹なり事ハ鐘の銘にみえたり 當院の林泉ハ風光閑
雅にして奇岩多し 大客殿 櫻の間 松の間ハ倶に宗達筆 桃の間上段
の松に鶴ハ倶に永徳の筆 葵間も同筆といひ伝へ 或云右京の筆 南廂
杉戸貳枚 西表象 東表獅子 宗達筆 東廂杉戸 南表楠に鷹 同北画側
杉戸 西表麒麟 北表唐獅子 東西白澤王 瀧本坊昭乗筆之小客殿熊藤間弱竹間篇間
上段樹木都て宗達筆 袋棚小襖古法眼筆 欄ハ悉しく想金極彩色 杉戸ハ西北極彩色画 當院
の客殿書院ハ伏見城の鐵劔をとりて小引移たなり 什宝 壺 鑑 豊太閤持料 玄井記跋 瀧子手
鐵劔 風爐 茶壺銘千香 古土茶碗 御硯 硯箱
○花生。庄之字太刀。西湖圖。和琴。文臺。櫻拂澤天儀。繪鑑。書撥。
秀吉公御所持。豊國神號秀頼公十二歳筆。秀吉公像秀頼公像 書 書
御硯。虎函明兆筆。十三佛巨勢金岡筆。菅神自筆法華譬喩品。
到得還年無別事一休筆 凡数十品あり略之

喝蘭人観耳塚

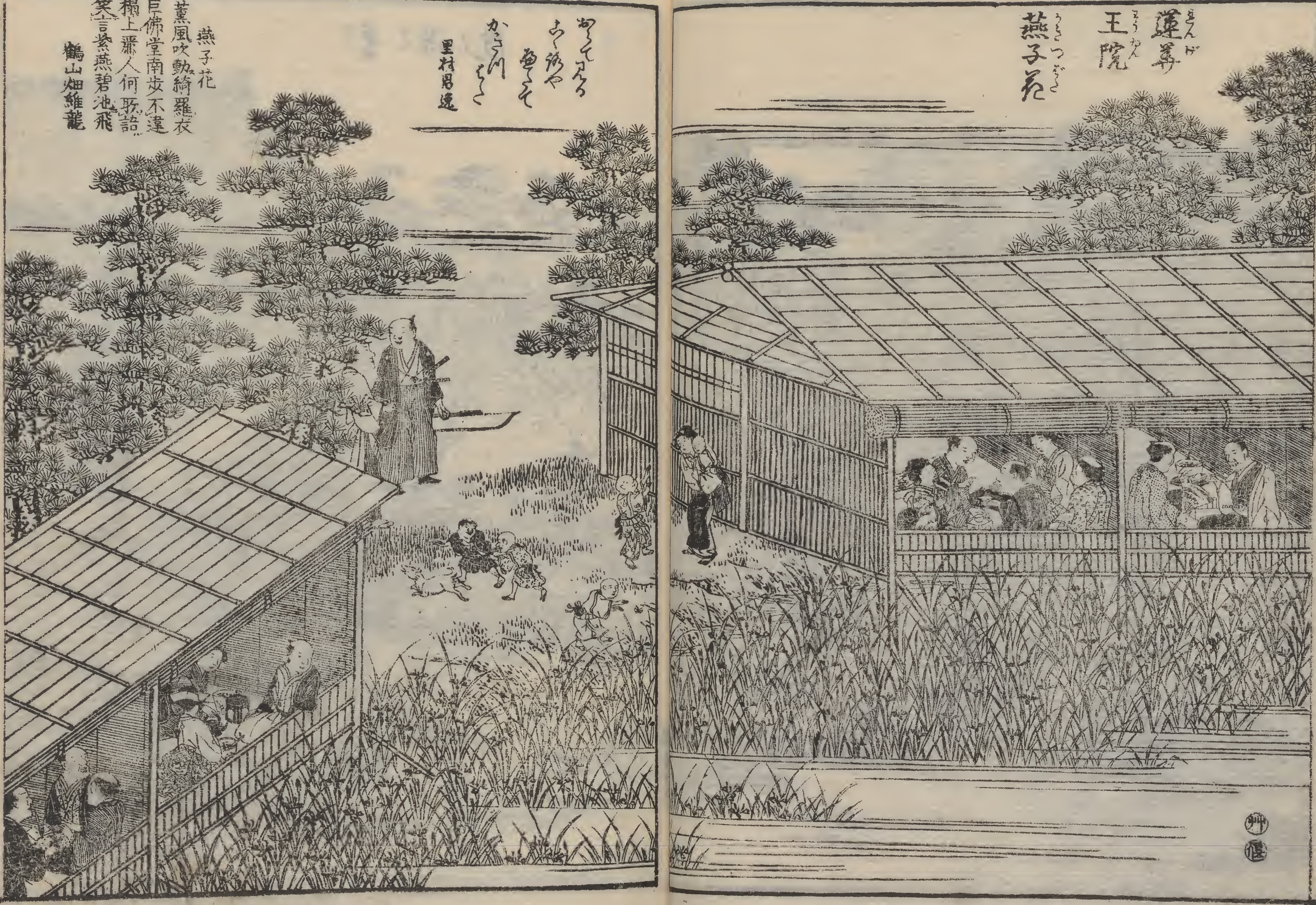
豊氏西征計
策完凱旋曾
此築京観喝
蘭入貢太平
日猶使遠人
肝膽寒

鶴橋
柚木太淳



智積院

蓮華王院 燕子花



書源院

其二

小堀遠州作

書源院 其弐

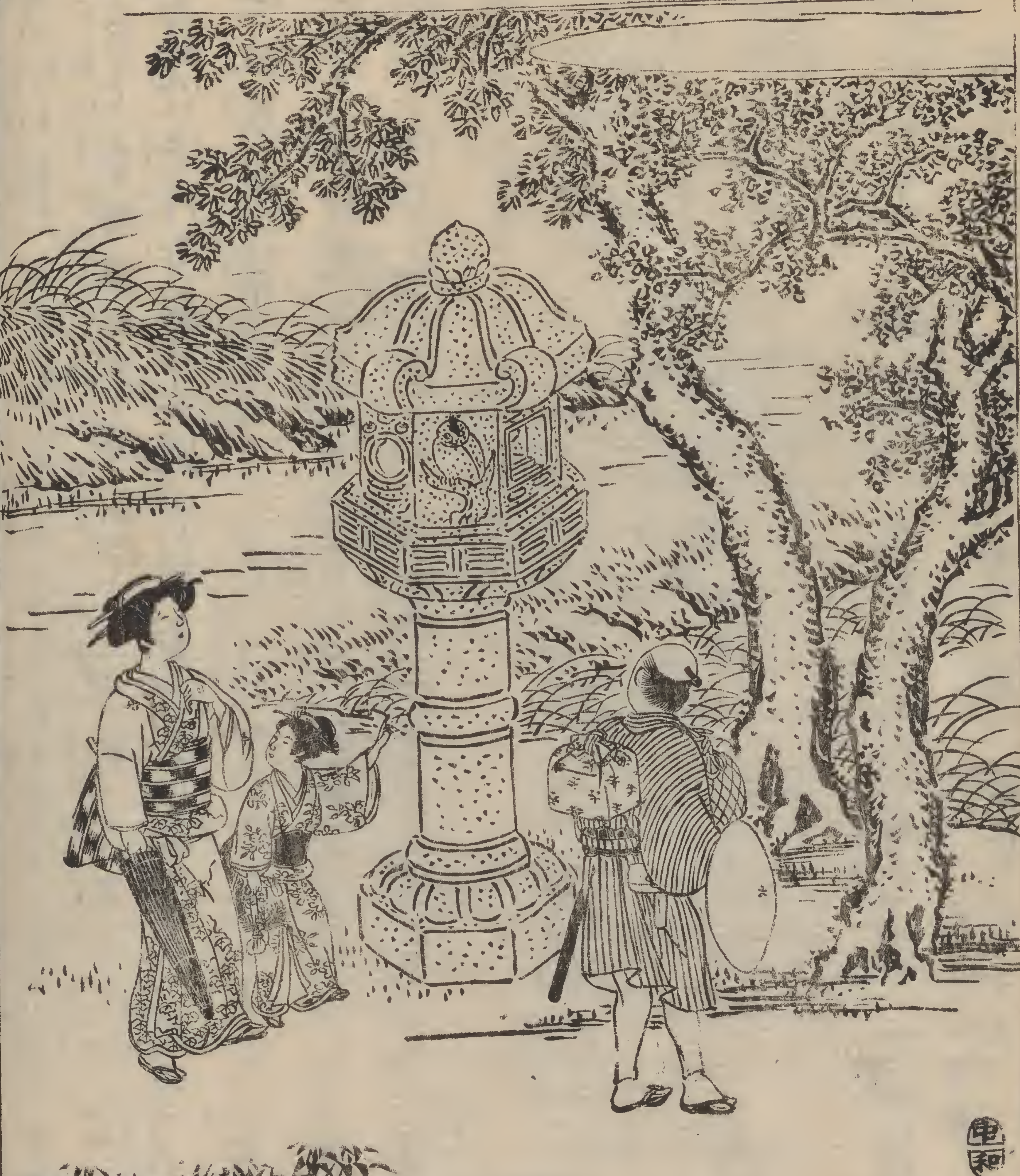
智積院 書源院の東にあり真言新儀派開基正憲法印此地初メハ豊太閤沙子棄君菩提の為に創建ありて祥雲禅寺と号す殿后故ありて妙心寺玉鳳院に移す其後東照宮ハ四足妙心寺の邦に入らせ將軍家より覚鑁派智積と隣て初瀬に小池坊と創し為院とさへに建修原為院ハ法住寺殿の古蹟にハ滑谷妙法院と限つて南ハ新熊野阪と限る林泉ハ東に翠巒層々として深林の中に寶閣寂々たり客殿書院倶に百花の圖長谷川等伯筆玄関松に鶴の画も同筆之みな総金極彩色之艸木の繪抔屏風一雙も極彩色にして何れも等伯の筆之生涯の奇筆にして世に比類なし

月輪 今の泉涌寺より南東福寺境内の惣名をいふなり九條殿傳領の地なりく關白兼實公の山荘ありて月輪殿と称す其孫光明峯寺道家公禪法を信し光明峯寺を建て毘沙門天を安置し東福寺を偃月橋の東南宗院の奥に移す聖一國師と号し後世東福創しく大劍とある愛宕山の月輪寺ハ後世月輪禪定兼實公愛宕山に住居し給ふおりと言ふ称す慶法師の開基之月輪ともいふる今の東福寺の境内のことなり

東福寺四至文 寺敷山堺事 弘安三年
限東月輪殿堀路通 限西法性堺 限南溪川 限北東北院田端。
弘安三年ハ聖一國師遷化の年なり

東福寺
三聖寺
石燈爐

原は世へ悪七兵衛景清の旧屋なりし此燈籠も其ころよりありしとかや此東ようつく晴しなより秋の夜の燈籠ともいふ



慧日山東福禅寺は初メ九條殿の別荘にして地名を月輪と號す次
四條院御宇嘉禎二年月輪禅定兼實公の御孫光明峯寺道家公
禅法に帰入し給ひ聖一國師を請じて開山として當山を草創し給ふ同四男
鎌倉将軍頼經公頼嗣と両代の時諸伽藍悉成就す塔頭五十餘箇寺
境内の林泉洛南の勝境にして東の山を光明峯と號け通天橋を法堂と
常楽庵の間にあり額は普明國師の筆橋下の楓葉洛陽の奇観之選佛場
の額は無準の筆衆寮を栴檀林として額は同筆龍吟水は山門の東南
にあり洗玉澗は通天橋の溪川をいふ偃月橋は原虎嘯橋といふ方丈と龍吟
帰宗の間にあり（今の橋は慶長八年十月仁叔孝公尼首座再興）千松林は通天の東林をいふ法堂の額
潮音堂は無準の筆妙雲閣は山門の額にして足利将軍義持公の筆思遠池を
山門の前は蓮池といふ無價軒は方丈の書院の外雲橋は五大堂の南洗玉澗の末に
架す二老橋は五大堂と三聖寺の間にあり五社宮は鎮守にして成就宮と号す
十三重石塔は藤丞相道家公神廟にして建る摩訶阿弥の旧跡は芬陀利華院

東隣の空地にあり墓ハ鎮守の傍ニあり當山の地主神なりとて重塔の際ニ古石
礎あり普明寺の内ニ開山塔あり常楽菴と号す額ハ後光明帝宸翰
其外當山の古跡名所多し塔頭ハ次下ニ著す

東福寺什寶

太政官牒
當山境内四至文　従光明峯寺殿下賜開山聖一
藕絲袈裟　壹頂
○神明より開山國師へ附属ス
蜀紅錦包物一片
○後水尾院ノ帝御寄附
菊貼錦包物一斤
○櫻町院帝御寄附
唐案宝筐鑰一重
○女院御寄附
左神宮亀甲御襪子　開山感得　一片
開山自讃頂相　一幅
同　乾峯和尚賛　一幅

聖一和尚之四字　光明峯寺殿台翰兼經公奥書　壹幅
維摩像　顧愷之筆　壹幅
跋陀婆羅像　雪舟筆　壹幅
顔輝筆　十幅
牧溪筆　三幅
門李昭筆　三幅
張即之筆　十一幅
呉道子筆　四幅
顧愷之筆　壹幅

同　佛光國師賛　壹幅
無準和尚筆　十六幅
宋人佛鑑禪師と云
聖一國師ノ師也
殿下道家公台翰　壹幅
開山聖一國師筆蹟　六幅
持明院太上皇宸翰國師號　一幅
月輪殿寄進状　一幅
恵日山圖雪舟筆　一幅
東洲和尚　宋人　開山法子　貳幅
釋迦像　呉道子筆　壹幅
左右文殊普賢　同筆　貳幅
佛鑑禪師自画讃頂相　壹幅
左右捌之鳥　同筆　貳幅

釋迦文殊普賢　思恭筆　壹幅
竹樓記圖　陳李昭筆　壹幅
岳陽樓圖　同筆　壹幅
醉翁亭記圖　同筆　壹幅
萬天寺額　無準筆　寺ハ筑前之　壹幅
方丈額　張即之筆　壹幅
旃檀林ノ額　同筆　壹幅
十六羅漢像　可翁筆　十六幅
五百羅漢像　兆殿司筆　五十幅
鐵拐王蟾　同筆　貳幅
涅槃大像　同筆　壹幅
兆殿司筆　百二十幅
雪舟筆　二十幅

元亨釋書　虎関和尚真蹟 全部三十巻箱入
張旭草書　一軸
兀菴和尚書　貳幅
陳季昭筆　三幅
方廣鐘銘　貳幅

開山護摩具　壹箱
佛鑑禅師印箱　八幡宮神影入　壹箱
黄金舎利塔　壹基
内ニ佛舎利水晶塔ニ入外箱四重
瑇瑁茶臺　六十箇 三箱
朱塗唐櫃

此外代々帝王の勅書将軍家の御教書和漢高僧の墨蹟名画乃筆物古器名品の数都て一千余種あり繁ふよれハ畧之
且塔頭の院々ふ霊寶奇物頗多し倶ふこれを省く

東福寺塔頭林泉ふよれハ後をとゝに挙る

○三聖寺　北門の内ふあり古ハ天台宗釈迦阿難迦葉ハ佛殿に安ス唐佛く 両金剛ハ運慶の作明徳年中足利義満公建立寳覺禅師を開基とス 愛染明王 八角堂ふ安ス 梟燈爐 近年三聖寺の林泉に掘出す古作也蓋ヨ梟の形を彫刻す傳云原公地を悪七兵衛景清の餝く具附ようきたにありしとぞ

○萬壽寺　今三聖寺ふ兼帯ス初ハ堀川院永長二年の草創平治三年ふ禅宗ふ改む五山の一寺ハ寶覺禅師を開山とし樋口富小路ふあり天正年中數地召上らるゝふよれて同開山三聖寺ふ移く佛殿観閣ス

○靈源院　龍泉和尚開基什宝ふ韋駄天画像佛舎利あり 後醍醐帝の皇子

○海藏院　虎関和尚の住坊也和漢禅刹云虎関和上諱ハ師錬嗣東山寳覺一 洛陽人貞和二年七月廿四日寂ス六十九歳

翰林五鳳集　海藏院偶作　虎関
南北東西不定窠一盂三事是生涯近来自笑如蛛子到晩區々觧造家

○正統院　聖一國師の法嗣円爾和尚の開基也兆殿司もあくに栖ありくて稲荷の神感を崇らく光明寺絵具谷より彩具を得ぬ人

○栗棘菴　白雲和上を開基とス諱ハ恵暁謚ハ佛照禅師 永仁五年十二月廿八日当居ふく化ス

○正徹叟墓　当菴ふあり 墓碑ニ云
清岩徹書記ハ紀氏東福寺の僧ニして和哥を好ミ為尹卿の弟子と成今川了俊とも親しく冷泉門下の友なりし菴を松月と号し後山科ふ移り招月とも申ひ家の集を草根となつけ那くされ菜也後ふ世ふのこりき長禄二年五月九日七十九才ふく寂す

○通天橋　額通天 普明國師筆
普明國師行業實録云
寺後ノ渓澗深邃而與開山祖塔阻絶衆病之久矣師親相攸芟榛除荒新開径直大路而架橋梁于其上扁曰通天作偈賀之
揮却風斤支落霞虹霓千尺截奔波通霄一路脚跟下来往人従鳥道過　普明國師

○歸宗院　客殿の美観也東の山間ふ茶亭あり採薪亭といふ又其上ふ自然居士墓あり

東福寺
通天橋観紅楓

天に通ふ名とさへうけく棚機のめとちれ橋を
あまかゆきをおりて
津葛蹊

通天橋観楓
霜染丹楓蕭寺秋
蒼々林靄夕陽幽
通天橋上凭欄望
一道清溪帯錦流
瀬尾教延

恵日塔頭
霊源院

不二庵

遺愛石

猶帯龍宮氣自慳
佳人遺愛寘中庭
石其萬古歸無朽
松是千年一様青

東海澤菴

惠日塔頭
卽宗院
自然居士墳
自然居士墳
白砂

霊雲院（不二庵と號ス　湘雲和尚の住房也）遺愛石（當院座中にあり相傳ふ此名石初ハ肥後太守細川光尚侯の持物なりしを）

湘雲和尚細川家にちなみて後まれに往く其時太守寺産五百石を與んと令じ給ふ湘雲辭して云此家の後禄の費ハ參禪の邪魔也願くバ是に換て座上の奇石を賜らん寺寶とこそ爲しと乞ふ因て應諾し遺愛石と号し是れ賜ものなり高サ三尺横ハ尺岩頭に小松巻栢を樹る石肌細密にして遠青し漆れに石排の須弥諸檀爲に附ありて其上に石標をたて其中にあり無雙の名石なり君家の記文あり桃林の巻に満り詩其の二三をここに擧る

朝鮮竹堂誌

更不見蓬萊之山在海中靈秀之峯
鍾異石長留苦鐵千年維峯巒性
奇如刻畫造物像之生人間天涯
爲此僅惜把爲太守寄于壽氏
家於其嫁眉上有松擔座几龍
之形只有百井臣瑞璘之奇安

桃玉色風清池日照中峯生紫烟
綠嵐深處傳清塵此石臺蓬
萊蓬萊蓬萊在那者軒回
陸車高東滿堂賓客法周綻池畔
不意爲吾中有回陸爲之法雪
勢古大其吉思名大造変
東汲人不識上人百之摩挲不已
依舊賞松根更不見汲山陰遂碑
革久藏於刻解甲嵩如良具雲
雲上至物懐傳千百物

癸未孟秋下澣　樵客竹堂題

釋文

君不見蓬莱之山在海中靈秀之氣鍾異石水齧苔蝕千年餘峯巒怪奇如刻畫造物偷之出人間吳海若皆嗟惜肥州太守好事者愛此劇於青娥眉上有孤松蟠欝虬龍之形下有百赤點綴璠瑤之姿安排玉盆置清池日照中峯生紫煙浮嵐滴水清漪漣始傳此石産蓬莱遂道蓬莱在眼前高軒置酒車馬来滿堂賓客皆回頭池畔石還為寺中有問誰為其主相雪曽知故太守問胡名遺愛太守恵政人不諼上人一日三摩挲石色依舊蒼松根君不見峴山墮淚碑載久龜龍剝鱗甲豈如艮岳靈雲上雲物衛護千百齡

癸未孟秋下幹　樵客竹堂題　鬻齒字改書

寛永二十年朝鮮信使申濡字君澤竹堂其號也此篇其自書艸法難讀令就真跡縮臨併附釋文按似紫煙之下脱一句然真跡亦如是不可考也姑俟博雅云　松窠杜氏識

有序今不録　林道春詩

巨掌劈開華岳胥飛為一朶玉芙蓉只看湖口九峯異何用陳朝三品封恠石旱蘭供佛印名山曽愧對閑顚按問遺愛點頭否須向生公堂下逢　石名遺愛故云

寛永二十年十月中使

羅山夕顔巷史

林春齋詩

奇石玲瓏浄几間主人愛見小廬嶺靈雲一朶髑髏寸泰岳叢根滿恵山

寛永癸未孟冬日

春齋向陽子

石川丈山詩并序

湘雪禪翁世遺愛石君、非谷太守細川荒尚公之所寄也、奇形怪狀、自然而然、惟夫匪造化一尤物耶、可謂戒和尚希代之寶也、慧嶺靈巖豈墟層峨崢嶸于几邊世間、足以爲幽居士諦翫奇章之嗜、平泉之戒、袖中東海、心裏蓬萊、可併按矣、太歳韓使申濡、及東都羅山、昇国菩齋、品藻斯石以扁、潤色三子者之撰、各探驪珠獲餘其鱗甲、余又奚言、雖然、如言于魏褕化於殼城者、彼之遠祖、我之同姓、泉寧益石、古之遺愛也、況禪公翁之需者所據、豈用固讓爲哉、洒漱十韻之狂斐、以續貂而已、

一拳太湖石、萬古小仇池、水匯連三島、雲晴秀九疑、危峯鋒及競、峭壁画屏奇、鶴怪巢松對、龍思潛岸涯、神功加白王、鬼斧削青磁、徐出明洞、似遊五岳岐、儼嶋曾在此、佛日既相移、覓句追摸軾、留圖戲郭熙、苟除元亮逕、又被遠公麾、遺愛爲僧寶、傳觀無盡期、

三州泉丈明狂叟石丈山渉筆於四凸巷之詩僊堂

杜氏微書

右は日の山下靈石にしあれは御寄也 ある大とこ細川幽斎の
大守に寄らし給ひし事 久しくあれは是の主なりしは…
大雪身ほうれ… 令嗣覚尚の…細川の盆石をおくりつる

おもひくしくさしてなきぬれんみかさ山のかけみえ常に知りて上に五位の
私かりし世のみかりはるさしへて呂伯と申しわたしにいひつく會うしの緒に
わけ行る者大きに苦るみのある口うしの空に知もし来ますく後々し
きこへしかなるひとはにかへてうへをしらんへのち此いろんなと安さのしき
ちかくところかしあかにほられる事ありうきのの國の人の勢のくにかくとかくれ
二條の人々らし共に筆つらぬて絶てをてしもあり思ひさまにはまさしくすぬ
あまりにをの続にほとめきてし代筆とかくみへかたにかりてしはるへきの
みかりあみのあんたきしりけ人まるへるときうるやいかん兆名和公の仏山を
韓愈と和し花至孔の徐生につける書めしへきくらにいひ出わ龜とよかれ
をやしかくいはなるにいと方あつてをかん共段記に何といやうししかあり

初しられ　嫁りあし人を　名月や　禄をあれ枝
をかりさく　少しての後の　ちみ名に　かたへ以るに
絵きたる　をれかりし美　ともかは　君のふなしみに

名はけしん　人さりし世ん　経俳はや　うしもあしと
業にふるとも千　俤けりあるこゝる　御清うらは　法の別あれし
いてやこの　世にかちうすゝる　み形のさしは　かの絶けい乃
まへ此あしれ　きえてしは後の　形見とも　とりくうへとさに
まゝへさん　情こを手の我　古山路や　宗の片係こし
ぬきみれに　まなんまとかく　きれたぬに　加寸紫葉乃
せとひかを　千年の行此　様しかりぬ　とかゝるへし有を
あ遠ほしか　みをあとか出　草入とく此　あけの地とそ
おてさう見人や八

冷泉為景卿

秘書監集序

さふみのまれなるいそは此後世に又見てうしとはいくたひかひこそあれ

權中納言基理卿

ちかはおもく遺愛ろてありくそのかさかれ名を先にたとへつくの
歌や満に壇上この時にの歌とを見せやひ出や何のたれも

なる人へ井寺のゝくほくうゝめ勝一首をみるにありく
ものかなしきことを生得てしわかるゝの花をも賞し郎く

前參議持豐卿

みやこおもひうし世はのはなれる霊芝院和尚は佳僧にて都に
來の義かゝ伴る時に飛鳥川の水あまたさからぬ色に
たくみあらさを愛ゝあの世のうし肥のらうを見れ法主のおほえ
おほしはそあれおれのうしにて法主相国和尚にさゝ
いくらしあんとして遺まて見れ法中らかたら時本
名もなる人にかへやかしへのことの葉をもちひてつるまて
をひも傳さてあはしめきのことをみあらえめして法のの
花もれすしてさらに遊の月もさやかならず花やもし
西に唐をも上もまさし可しうし〳〵にあらさらみれ世乃
のもとしの傳やこもの歌をあはれみてさらに一まもと
風をとゝ不染しらて不らも和寺を法し見人ならば
かれろしうるをとかへおちつらはす常に飛かさくて
かしう古まゝるおはれと庭の前花に〳〵の上ゝに昇らに婦ことを

寛政元年のいにしへ昨月とりめの五日ちかしるなる
名月

○正覺院 庭中の泳と松月池とにて容数ハ
若田徳若院伏見よりうつされ桜に

○荘嚴院 林泉風景あつく赤岩あり雙鵠石若獅子石若といふ當院を乾峰
和尚の開基にて佛殿に乾峯の筆正續の額あり

○南明院 大檀那ハ豊太閤秀吉公の御妹朝日姫 圓初將軍家の御簾中
なり 天正十八年庚寅正月十四日 聚樂館にて薨去したまふ 四十八歳

開山南明院殿光室宗玉大禪尼と法諱をと開基恵日山百十世
業仲和尚諱明紹永亨六年十月十日入寂 謚號佛眼 明兆と号る業仲和尚の

○兆殿司墓 南明院南の山中にあり 法兄く永亨三年辛亥八月廿日寂す 八十一歳

後成卿墓 同所にあり ○後成卿女墓 同所にあり 淨如尼と号す 歳ゝ云 後成卿の母と墓ともに 謬之四至之文の云

年譜に遠くにて 俊成に古墳多し 法諱詳ならす 次原ハ法性寺の境之
あてに永明院と創次一代の院主也我ら南明院と異なる此墓今
南明院の地之左の丞文永明院にあり

其置文云

法性寺俊成の御墓ある山林の事

合

一 東のかきりは上のいまうれかうりきさきりん堂谷へゆきてみちのきはまて
一 南へのかきりは [illegible]
一 南ハ西東へのたにこいけの上下南の山きはをかきりて [illegible]
一 西ハ山のはしをさて南へのみちをかきりて [illegible]
一 北へいたりのさかいはとらてかきりて [illegible]
右の四至ハ山下地とも [illegible] ほのための
しもしし
かうあん二年八月八日

淨如判

古文書云

俊成卿墳墓、号自月見殿、の右并二陵中耕當院二陵
深掃墓壇、守護竹木、下地筋彼亡魂菩提、彼恐々謹言

八月廿七日

永仍法僧亮ら申

祖禪判

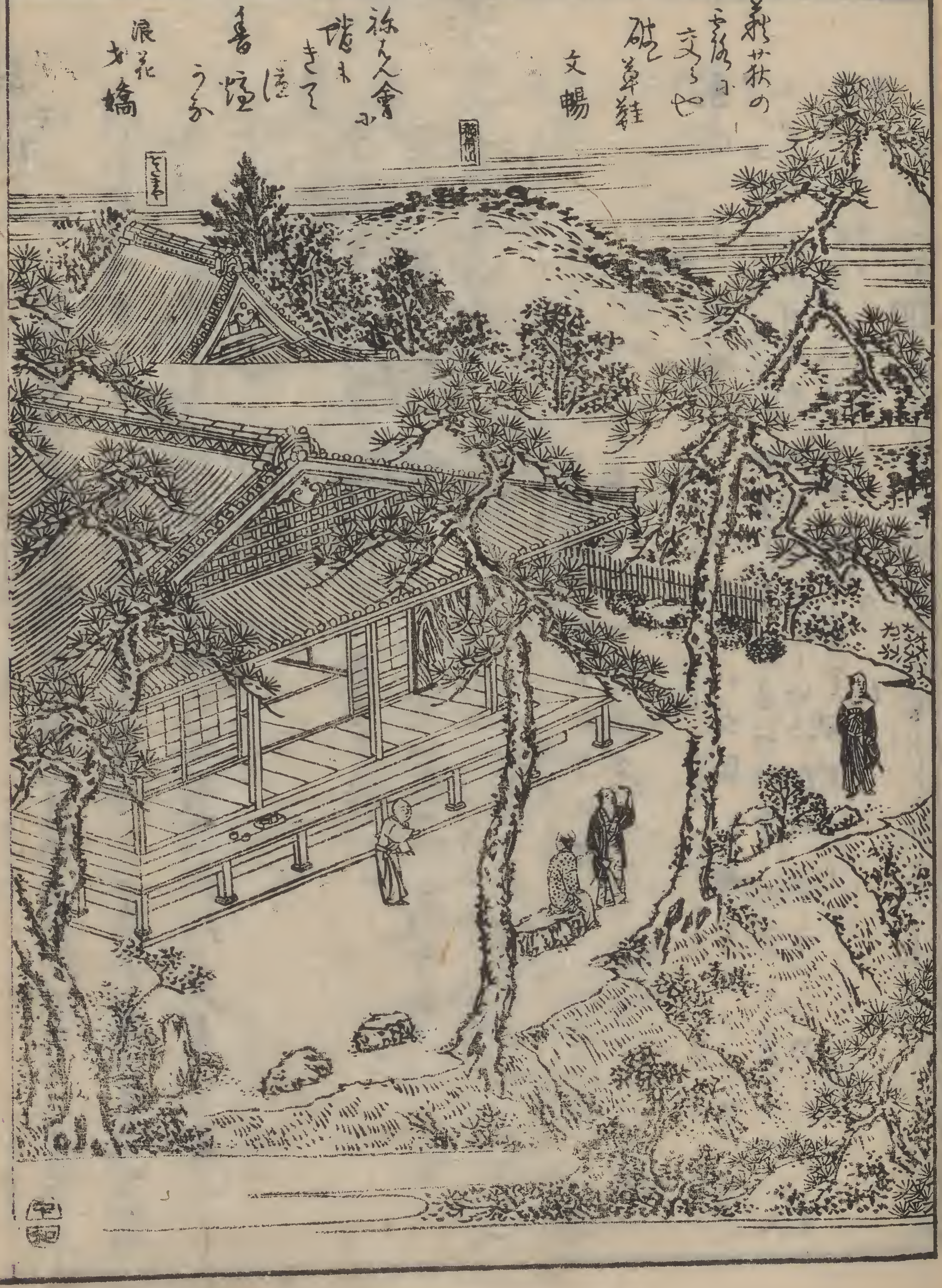
祖禪東福住持芬陀利花定山和尚之

東福塔頭
荘嚴院
双岐石
中和

獅子巌
紺眼星懸テ威ニス百獣ヲ赤毫焔起テ照ス群生ヲ

恵日塔頭
南昌院

東福寺
南明院
俊成卿墓
同息女墓


文暢
浪花

東野州聞書云
或人語しハ後成卿の墓東福寺の永明院の奥の山にありとや申せしと
也永明院の主あるじもおそらくは毎月廿九日今も参り詣ると申しとかや
毎朝大悲咒一反宛廻向あるハ五條三位俊成卿なとゝ入よし書あり
彼院の僧申之

嵯峨記 藤原植通云
東福寺南明院ハ俊成卿の建立とぞ侍る

拾玉集 於永明院俊成卿墓
露分る道にハおもかけ親の跡とふ人をは志るや露の古径　寂済

清原深養父旧蹟　底家の奥之桐佳ハ屋敷大和大路二之橋より南二町許東側二条の小路の東に入所深養父の故宅也
跡なりしと竹林の古井あり是ハ深養父の古跡のしるしといへり又東乃奥に
古墳あり是ハ深養父元輔清少納言なとの墓なりといへり詳ならず
南の隣家に小堂あり観音安置深養父の念持仏也
三条家の後胤清原氏に伝はる慶長年中に豊臣
清原の後裔とあり又家に鍵を家蔵せしといふ
秀次公より其領をとりて其後少禄も賜はりて家に
ありといふ此所の地名を月輪といふて今も其旧地に
小記をそへ此所の字を深草郷保町といふ家に
家系記に深の山城国紀伊郡の字を(?)
紀伊郡の記とくされも又深草保町と書
慈鎮和尚の歌并拾遺元輔かれこれ相伝へしと純宣が桂の家に會して又

の日元輔が月輪といへる所に同人と共にまかりてけれは元輔清少納言
云侍りしと純宣ハえはうちまへりしと云侍りしとある哉ともに元輔か侍りし
これわすれかたにかゝるけしきさそく讀侍りしと云
家集 かはらなる所に人々まかりてけるに人にかはりて
ここ月の輪といふ所に月の輪といふ所にすまひけれは
月の輪にあそふとも志らて植おける花や君を待らん　元輔

清原深養父家系 慈在
○天武天皇―舎人親王―貞代王―有雄―通雄―海雄 筑前守 賜清原姓 日本紀作者
房則 豊前守―深養父 内匠頭 蔵人所雑色―顕忠 下野守―元輔 肥後守―清少納言

舎人親王墓 稲荷社説云稲荷大鳥居と楼門の間北側之辺年間社建ぞ藤尾
小墓在の時藤社と号に原藤社社山地にあり稲荷社山上三の峰の山中
の墓地に塚跡とあり藤尾ハ今の地に移さる藤杜の社傳云山城国紀伊郡藤尾
墨染里ハ深草の郷中之今ハ伏見の墨染といへむかし昭宣公薨し
給ひ時上野岑雄が讀し歌よりそうハ墨染にさけとおもひし桜も今
いふ深草の地名とあり芝居されの家新しくかゝへて
むかしれおもかけもなく侍りける

稲荷社（いなりのやしろ）
初午詣（はつむまゝうで）
初午の
ことにあひてき
いなり山
しるしたちたる
杉も
人にとゞく
伴蒿蹊
下馬

深艸里（ふかくさのさと）
墨染（すみぞめ）
花魁（おいらん）
一味
月含微暈夜禽呼
花影朦朧村妓壚
伏水客船須早發
茜裙莫漫酔商夫
鶴橋柚木太淳
伊勢屋
伊勢屋

伏見山（ふしみやま） 今の城山なるべし 一名松原山

拾遺愚草 山家ニ古松多し

伏見山妻こふ鹿の涙をやかりほの庵ハ萩のうへ乃露　定家

玉吟

帰しる山秋の田面ハ色はくハ松のみよりや露ふおかりけり　家隆

八月十五日ふしみふみゆきありく人くれ侍

よ侍き野望ゑひ名はわくふ

新集

おもふとく松原山の秋風ふゆへあれさよく月出ぬなり　伏見院

伏水の霸跡ハ文禄三年豊太閤初て城を営給ふ監官ハ佐久間河内守瀧川豊前守佐藤駿河守水野亀之助石尾與兵衛也慶長五年七月晦日石田三成か叛逆ニて金吾秀秋宇喜多秀家此城を攻る江州永原の兵ハ華嶽ふ通じて落城ハ城将鳥居内藤庚なと戦死して其名永世ニ輝ハ今ハ荒廃田園となりて桃花多く弥生の盛りにハ遠近の人こゝに遊宴す特に宇治見ともいふ　月見ハ岡　風色幽ふして絶情の名區也

宇治白く桃きく陰ハ花菜の邪　信徳

大名の家成桃乃をとけホ　正秀

月見せんぬしみの森ハ捨廓　去来

水寒し生駒にほぐく春の水　移竹

山河存旧色　林樹競芳菲　荒苑弾丸尽　空看春鳥飛　梅華仙

多少田夫屋　相連古塁間　幼児纔五歳　能説破三韓　仝

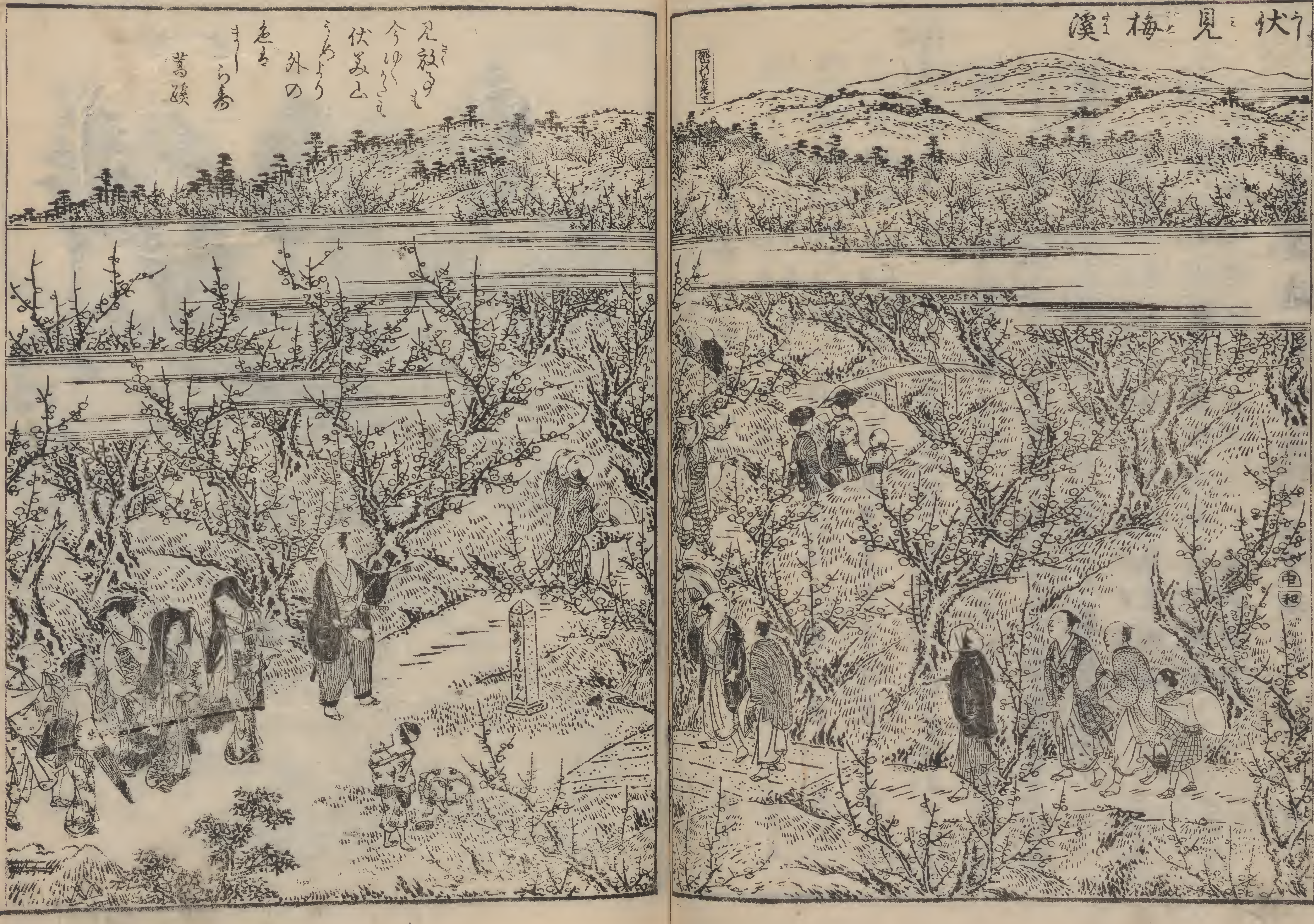
桃花終不言　高臺見陳跡　倚杖日黄昏　空谷多年恨　仝

梅渓ハ城山の北ふして五郎太町福寿庵大亀谷八科嶺まて初春の清香四方ふ薫て名苑霜葩艶しくして痩枝に花婉そうそう清賞しく洛下の騒人ふの此の陰に殊更の趣しかも羅浮の夢に遊が題詠萬斛の香を備えて天下の春に魁をとる東坡の辞あり

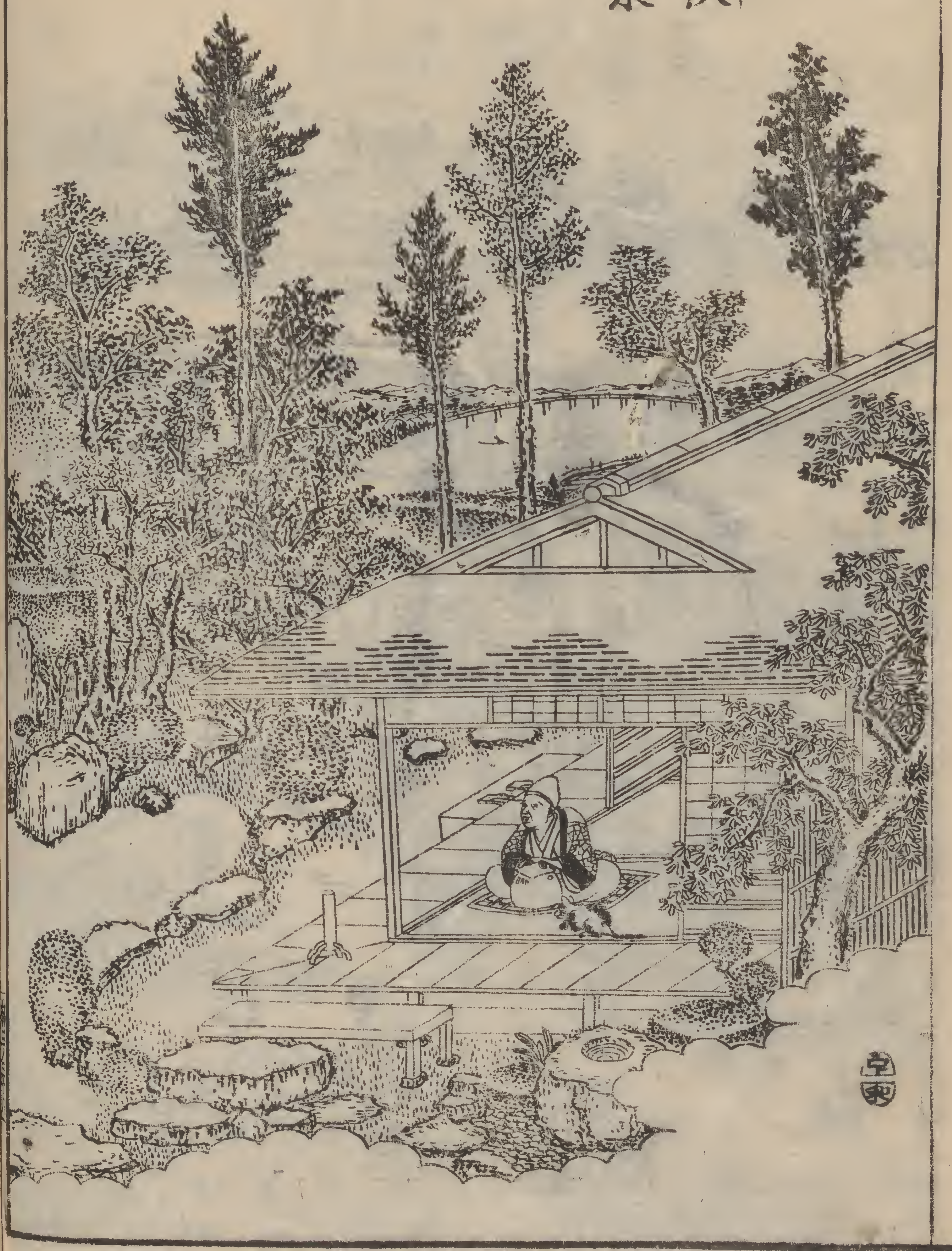
風香雪白大亀渓　千樹梅花東復西　若使林逋知此地　孤山春静幽栖　龍公美

荒丘断壟旧金湯　路入梅花春漸荒　斉是羅浮林下夢　笑拋一盞酔猿郎　六如庵

梅遠近南すべく北すべく　蕪村


伏見梅渓

伏水

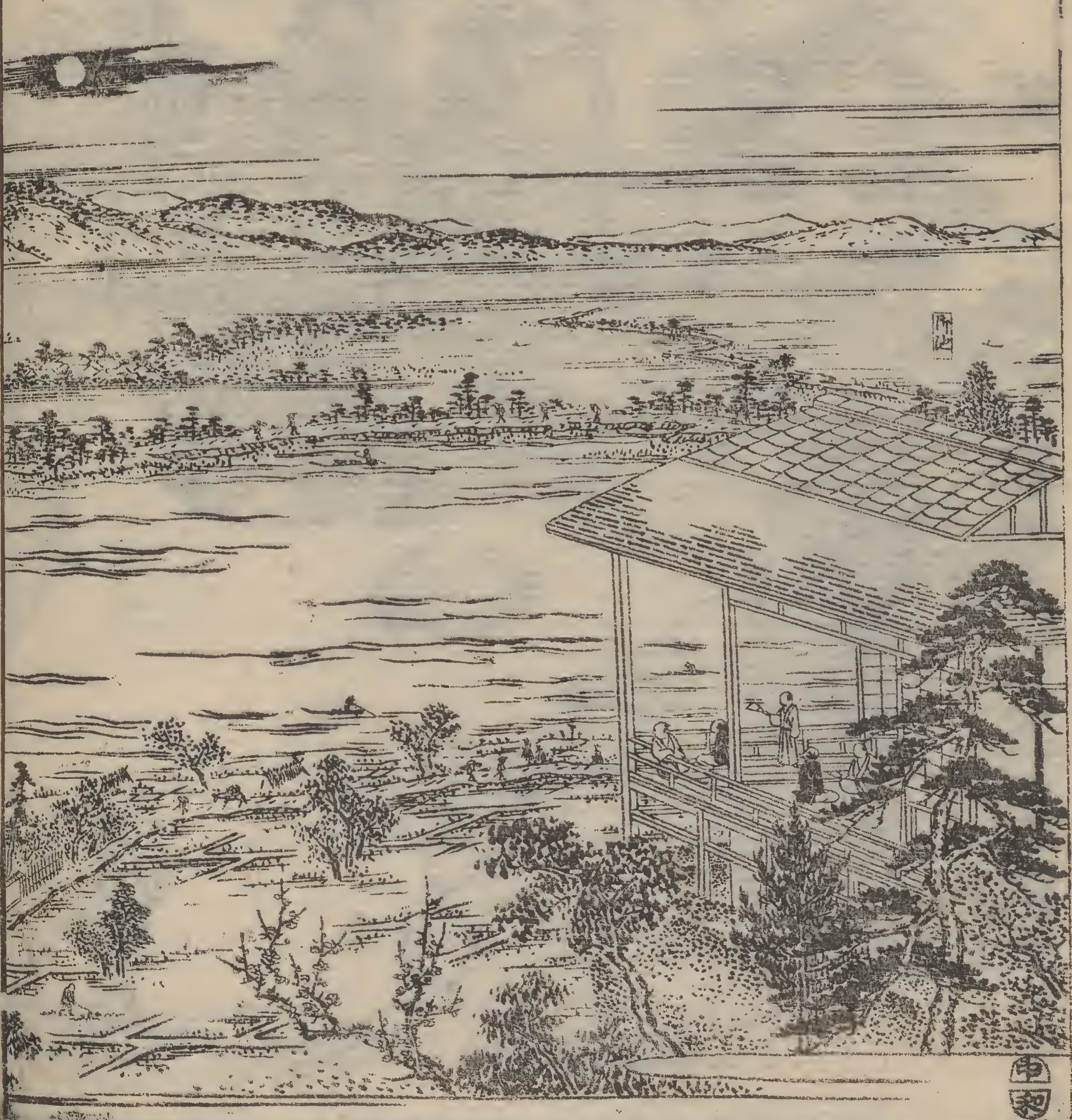


龍徳庵

小堀遠州作

伏水 蘆雲庵

竺巷和尚の開基にして門の額も此和尚の筆なり



兎道舟中

緑水青山一色秋濯纓詞客棹孤舟興來欲詠滄浪曲又恐蘆洲驚白鷗

艸廬

都林泉名勝圖會巻之二 終

梅の香やそれに月夜の面白く　かゝ 千代

仇を思ふて報ずるといふ事を

手折らるゝ人に薫るや梅の花　仝

衣裡の中に裡なからたゝむめの花　浪花 大江丸

暇のさめる伏水のむめれさうらふか　同 二柳

梅が香や山も葛屋も霧くの空　平安 嘯山

むめのそれ我の月かゝる折そやかな　惟然

息うしみし衣のおとをむれや梅の月　定雅